

六花

8

俳句雑誌りつか
2012 (平成24年)
Cover Dress of Little Bird



てのひらや蛍火の息巡せて
てのひらを焦がしてゐたる蛍かな
蛍沢背中押す手の伸びて来し
昼顔の巻きつく篠を手向けむ
朝風に干してありけり浴衣帯
墓洗ふ水たちまちに灼けて来し
炎昼や墓地の迷路を水提げて
蚊くすべに玉蜀黍の髭を干す
蛍や鯉を呼ぶかに手を打つて

寝そべるや畳重たく風死して
夕風やひいやりと猫抱いてゐて
風死すや煮物焦がしてゐる匂ひ
氷挽く音のせかせか風死せり
ちちとのみ一声鳴きし夜の蝉

藤生不二男氏菜園 7月22日

生傷をまあるくなでて大西瓜
もみあげに塩かがやける日焼の子
夏蝶を楠の大樹の降らしけり

舟板や浜屋顔に影もなし
爪立てて出水の道を亀渡る
四阿に蟬をひとりで聞いてをり
飛び去りし帽子の浮ける青田かな
くちなしの花を手向けむ明日は雨
枝先にむらがりゐたる蟬の殻
朝風に日傘を深くさしゆける
木漏日となる一瞬の糸とんぼ
とんぼうの昇り行く空深み来し

夏シャツをはだけて男通りけり
ざりがにの水なめてをり茶虎猫
磐石に冷し麦茶を分かち合ふ
夏つばめ連理の枝を抜けにけり
脇涼し冷し麦茶を抱き歩き
極楽やふはふはとして夏落葉
見上げたる木葉は病んでをりにけり
緑蔭を抜け来る風の匂を一つ
下闇へ人のつきつき消えゆけり

羽拔鳥羽ばたく力みなぎらす
緑蔭へ鴉の声の移りけり
萍の動かざると亀のごとし
萍の身動きとれぬまで生ひし
暗闇に働きゐたり蟻の列
一劫の石五月雨れてをりにけり
星尽くす梅雨の台風一過かな
幸せになりたい人は緑蔭へ

学校へもらはれてゆく錦鯉

笹村 政子

がっこうへもらはれてゆくにしきごい ささむらまさこ

青楓透き高々と塔のあり

卯の花やさざ波光りつつ消えて

燕の子わが足音にさわだてり

移植せし母の一八色淡き

錦鯉への情が「もらはれてゆく」と、言わしめた。鯉を飼育して大きくなりすぎたのか、飼われない事情ができたのである。やむなく学校の池で飼ってもらうことになり、いよいよその日が来た。長年飼育している鯉と飼主の間に情が通って別れがたいのだ。作品の上では何も述べてないが「もらわれてゆく」に万感の思いが込められていることは疑うべくもなし。里子に出すような場面で、しみじみと読者の琴線に触れてくる。鯉は年中居るが、観賞用として錦鯉の美しさと活発さが夏の風趣にふさわしいところから夏の季節。夏休みの学校へもらわれていく。

雨の日は手足きやくきやく雨蛙 貝森 光洋

あめのひはてあしきやくきやくあまがえる かいもちこうよう

鯨大群戦争支度せにやならぬ

獅子の子のつもりでプールに突き落とす

薔薇の門潜れば王侯貴族なり

故郷によく似た姿の虹架かる

「きやくきやく」の擬態（擬音）が心地よく響いていいなあと思う。蛙の場合の擬音は「げろげろ」「コロコロ」など童謡にも多い擬音。だが掲句は擬音と擬態とを同時に表わす「きやくきやく」という言葉を編みだした。雨蛙の鳴き声を「聞き做し（ききなし）」したら「きやくきやく」は言い得て妙だ。鳴き声ばかりでなく「きやくきやく」を擬態音としてみれば、雨蛙が、水の入った長靴を履いて音を立てながらユーモラスに歩いている場面をも連想させる。深刻でないのが光洋の持ち味。

花びらの内より暮るる牡丹かな 藤生不二男

はなびらのうちよりくるるばたんかな ふじおふじお

手鏡に雲の映れる立夏かな

陽光を捉へきれざる新樹かな

柿若葉透けて見えざるものあまた

刻告ぐる柱時計や麦の秋

牡丹は花の王者。その牡丹の色は内側の方が色が濃い。夕暮れの牡丹をそう示されたら、なるほど内側から暮れていく感じがする。事実は外側から暮れるのだろうか詩の真実で内側から暮れるのだろうか。掲句は焦点を鮮明に詠んでいる分だけ光る。しかも、整った調子は格調高く覚えやすく、口誦性（こうしょうせい）にも優れている。飽きの来ない立派な主観写生の句である。夕暮れの牡丹を見直してみたいと思わせる力強さをもって読者の心を打つ。優れた俳句の条件の一つは色紙に書いて掲げても長期間耐えられるもの

雪 卿 集

佐津のぼる

流木の迅さ見てをり梅雨出水
父の世のほんのにほへる梅雨ごもり
梅雨明けの海の垢浮く船溜
早苗饗の酔ひ残る足踏ませをり
白粥に胃をととのふる暑氣中り

母の一八

笹村政子

青楓透き高々と塔のあり
卯の花やさぎ波光りつつ消えて
移植せし母の一八色淡き
燕の子わが足音にさわだてり
学校へもらはれてゆく錦鯉

せつ じゅ しゅう
雪 樹 集

滝行者

高瀬
博子

滝に入る女行者の束ね髪
滝行者見守る吾も合掌す
滝行者息つぐ水を放ちけり
滝に来て迷ひ一氣に断ちにけり
借景も女将の自慢夏座敷

花
桃

溝
弘志

夏めくや着ることもなき上着持ち
武者人形泣き声だけは勇ましく
暮れなずむ時まで仕事合歡の花
湯の菖蒲束ねし上に乗りにけり
どう見ても紙の如しや鉄線花

蛭雪譚 六甲

七月号選後に

道よぎる八十八夜のもやひ傘

梶浦玲良子

もやひ（催合、最合、持相、摸合、諸合）は、「共有する」、「持ち合う」を意味する八行四段活用動詞、もやふ（催合ふ）の連用形、名詞化したことばで舟をつなぎ合わせて停泊させることを舳舟などという。「もやい傘」とは男女の場合についていう。相傘や相合傘。最合い傘。男女の仲を示すいたずら書きの一種。簡単な線書きの傘の柄の両側に二人の名前を書くもの。道を過ぎつていくのだから、相合い傘の中は男女だが、が決めつけはいけない。もしかしたら「男と男」だって現代は充分にあり得る。相合い傘の連想は広がるばかりで、落ち着かなくなる。

ほろ酔ひの海市を前に猿回し

海市とは蜃気楼のこと春の季語。密度の異なる大気の中で光が屈折し、地上や水上の物体が浮き上がって見えたり、逆さまに見えたりする現象。晩春の穏やかな日に現れる。富山湾や様々な地方でも観測される。小説では福永武彦の「海市」についてそのものが海市（蜃気楼）のごとく、実は手に入らない物であったということで、男たちは振り回されるばかり。しかしそれだからこそ魅了されるのだという。男たちが右往左往する様がよく描かれている。との評もある。（以下略）

六花集

大 鈴 雨 花 石	八 向 蓮 空 蟬	姉 放 滿 春 春
梁 蘭 粒 大 垣	方 日 の 蟬 時	の 課 天 潮 眠
の や を 根 の	に 葵 葉 の 雨	許 後 の の や
大 母 弾 校 穴 ^あ	空 や 空 受 古 寺	父 の グ 星 残 身
百 の き 舎 太 ^う	を を け 木 寄	好 ラ に し の
足 懷 非 の 積	裂 仰 止 の り	み ド 眠 も ど
落 あ 牡 見 み	き い 切 に 枝 そ	し ピ り の こ
つ た 丹 え な	け で 胸 ぬ り 古	ア ノ し の か
朝 た き 農 る	り を 張 か な	薇 剪 ノ 新 中 水
刊 か け 学 芝	稻 張 か な	つ 樹 鯉 ^に 流
紙 し り 部 桜	光 れ な り な	て 光 幟 節 れ

江
見
巖

加
納
淳
子

平
居
濤
子